「教育臨床総合研究紀要２　2002研究」

韓国中学校「国語」教科書の研究（２）

A Study on Korean Language Textbooks of Junior High School

足　立　悦　男*　申　　美　熙**
Etsuo ADACHI　　Mihui SHIN

要　　旨

本稿は、韓国国語教科書の基礎研究として、中学校「国語」教科書の小説教材について考察する。前稿「韓国中学校国語教科書の研究（１）」では、中学校「国語」教科書の仕組み、「国語」教科書の単元構成、「国語」教科書の学習の手引き、日本の教科書との比較、などについて考察した。また、資料編として、「国語　１－１」「国語　１－２」「生活国語１－１」「生活国語　１－２」の教材一覧（大単元名・単元構成・題材名・ジャンル・著者・出典）を紹介した。本稿では、前稿をふまえて、韓国「国語」教科書（１－１、１－２）の全小説教材を取り上げる。取り上げるテキストは、2001年からの第７次教育課程によって編集され、2001年から使用されはじめた１年生の「国語」教科書である。１年生の教科書をテキストにしたのは、現在ではまだ３学年全部は使用されていない状況であることと、１年生の教科書は２年目の使用になり安定的なテキストとして普及している、という理由からである。小説教材については、題名（韓国語・日本語）、作者、出典、単元名、頁数、登場人物、あらすじを紹介する。そして、「学習の手引き」と『中学校国語科教師用指導書』を分析することで、韓国の小説教材の学習内容を明らかにしていく。巻末には、資料編として、本稿で取り上げた韓国中学校「国語」（１－１、１－２）の小説教材一覧表を示しておく。

［キーワード］　第７次教育課程、韓国の「国語」教科書、韓国中学校の小説教材、学習の手引き

第１章　中学校「国語」教科書の小説教材

１．아버지의 유물（お父さんの形見）

「韓国文学叢書３－口承文芸」徐デソク編、ヘネム、1997

１－１　１．文学の楽しさ　小単元（２）　全文（P14～P19）

* 島根大学教育学部国語教育研究室
** 島根大学教育学研究科修士課程

登場人物　三人の兄弟、泥棒、鬼、虎

あらすじ

貧しい家のお父さんは形見として三人の息子に臼、瓢箪と竹の杖、太鼓を残した。三人の息子はそれをもって金持ちになって再会しようと誓って一人旅に出た。一番目の息子は臼を回す音で泥棒を脅かして、逃げた泥棒が残したお金で金持ちになった。二番目の息子は瓢箪と竹の杖で骸骨を装い鬼をだまし、金持ちの家の娘の魂を取ってきた鬼から魂を取り返し、その家の婿になって金持ちになった。三番目の息子は太鼓に合わせて踊る虎に出会い、虎と共演して金持ちになった。三人ともお父さんの形見をうまく使いこなし、金持ちになって再会した。そしてもう一度お父さんの恩恵に感謝した、という物語である。三人の兄弟がそれぞれの才能を生かして成功する。それは父の形見のお陰である、という儒教的な倫理観をふまえた作品である。

・この教材の「学習の手引き」については、前稿「韓国中学校国語教科書の研究（１）」を参照。

２．이해의 선물（理解のプレゼント）

ポール・ビラード（Paul Billard、1910～1974、アメリカ児童文学家）

柳玲（ユ・ヨン）訳　「中学校国語１－１」1989年、教育部

１－１　１．文学の楽しさ　小単元（４）　全文（P29～P34）

登場人物　ぼく、ウィグドンおじいさん、母親、兄弟、妻

あらすじ

ぼくは子どもの頃、ウィグドンおじいさんの店で母親によくあめを買ってもらった。母親が何かを渡したらあめをもらうのを見ていた。ある日一人で店に行って、あめ代としてサクランボを渡した。そうしたら、ウィグドンおじいさんはあめとおつりをくれた。

大人になったぼくは熱帯魚のお店屋さんになった。ある日、幼い兄弟が熱帯魚を買いにきて、魚代として払ったお金が全然足りなかった。その時、子どもの頃の出来事を思い出し、おじいさんのしたように熱帯魚とおつりを渡した。子どもの頃、ぼくの無邪気な心を理解してくれたウィグドンおじいさんのやさしい心に、いま、大人になってふれることができたと思った。このような心境を妻に話したら、妻もやさしく理解してくれた、という作品である。子どもと大人の心の交流を描いた作品である。アメリカ文学の翻訳教材である。

・この教材の「学習の手引き」については、前稿「韓国中学校国語教科書の研究（１）」を参照。

３．강아지 똥（こいぬのうんち）

權正生（クォン・ジョンセン）「キリスト教教育」1969年６月号

１－１　１．文学の楽しさ　補充・深化　全文（P42～P50）

登場人物　こいぬのうんち、すずめ、つちくれ、にわとりとひよこ、タンポポ

あらすじ

こいぬシロのうんちは、すずめから汚いとけなされ、土くれからもばかにされた。春になって、やってきたにわとりとひよこからも、誰にも必要とされないくずだといわれた。何の役に

も立たないくずだと思って落ち込んでいたこいぬのうんちは、タンポポに出会った。そしてタンポポのこやしになって星のようなきれいな花を咲かせた、という物語である。自分を必要とする人との出会いを描いた感動的な物語である。

・この作品を読んで、人間の真の価値とは何かについて深く考えてみよう。

・この手引きでは、人間の価値とは何かを考える、という学習をする。韓国の教科書では、生徒たちに自分自身の問題として考えさせる、という手引きが多い。この作品は、現在、絵本として邦訳されていて（『こいぬのうんち』チョン・スンガク絵　ピョン・キジャ訳　平凡社　2000年刊）、島根県国際理解教育研究会によって、日韓の実践交流のテキストとして使用されている。（拙稿「日韓文学教材の実践交流―絵本『こいぬのうんち』をめぐって」『月刊国語教育研究』2001年７月号、を参照）

４．여우와 뱀（きつねとへび）

「イソップ寓話」シン・ホンチョル・崔インザ編、文学世界社、1998

１－１　３．文学とコミュニケーション　小単元（１）　全文（P84、１頁）

登場人物　きつね、へび

あらすじ

きつねは木の下で眠っているへびをみて、へびのように体が長いと、高い木も登れるとうらやましがって、体を伸ばした。力を尽くして伸ばしたあげく、きつねの腰がおれてしまった、という物語である。イソップ寓話に特有の教訓話である。

・この作品を読んで、物語の意味は何か、イソップはなぜこの話を書いたか、考えてみよう。

・物語の意味（寓意）を読みとる手引きである。寓話のような教訓をもった作品は、日本の教科書には載っていない。韓国では小説教材のジャンルを広くみていることがわかる。

５．어린 왕자（星の王子さま）

サンテクジュペリ　「星の王子さま」全ソンザ訳、文芸出版社、1994

１－１　３．文学とコミュニケーション　考えを広げ　一部（P103、１頁）

登場人物　王子

あらすじ

大人たちは数字が好きだ。ぼくが新しくできた友だちについて話す時、彼らは一番大事なことを聞くことがない。大人たちは「その子の声はどう。その子が好きな遊びは何。その子は蝶々を集めているのか」ということは絶対聞いてくれない。かわりに、「何歳か、兄弟は何人か、体重は何キロか、お父さんの収入はどれくらいか」と聞く。それでその友だちがどんな人なのか、分かったと思っているのである。

・この作品を読んで、ものごとを判断するとき、大人と子どもは何を大事にするか、その違いを考えてみよう。また、私は何を大事にしているか、考えてみよう。

・大人と子どもの考え方の違いを読みとり、自分自身の考え方をふりかえる、という学習である。作品の一部分の教材化であり、日本の教科書にはみられない。韓国の教科書の特徴的な教材化の方法である。「文学とコミュニケーション　考えを広げ」という単元目標に即した

教材化がなされている。

６．탈무드（タルムード）

「タルムード」マビン・トケイア、シン・ヒョンミ訳、図書出版ダモア、1993

１－１　３．文学とコミュニケーション　補充・深化　全文（P105、１頁）

＊タルムード（Talmud）：ユダヤ人の律法学者の社会百般の事象に対する口伝・解説を集めた作品。聖書に次ぐユダヤ人の精神的遺産として知られている。

登場人物　船の乗客の４つのグループ

あらすじ

航海中の船が台風にあった次の日、ある島に漂着した。その島はたくさんの花や果物の木、きれいな鳥の鳴き声が聞こえるところで、島に上陸して少し休むことにした。乗客は５人ずつ４グループに分かれて行動することになった。

一番目のグループは船に残った。船から降りて島をまわる間、船が出発したらいけないという心配と、目的地に早く着くことが先だったからである。二番目のグループは花を見てまわったり、果物を食べたりして元気を取り戻して船に戻った。三番目のグループは船から下りて長い時間休んだので、ふと船が発つかもしれないと思い、急いで戻ったので忘れ物をしたり、船のいい席を取られてしまった。四番目のグループは船から下りて、のんびりと楽しく島ですごしたため、船が出発する信号の汽笛さえにも気づかないで島に残され、獣に食われたり、毒の入った果物を食べて死んでしまった、という物語である。

・作家が読者に伝えようとする意味は何か。私（生徒）は、この話の４つのタイプの人たちのどれに当たるか、考えてみよう。また、なぜそう考えたか、例を挙げて説明してみよう。

・作家の創作意図をみつけること、自分自身の考え方をはっきりさせること、そして自分の考えを説明する、という学習である。韓国の教科書では、このタイプの手引きは多い。

７．호랑이의 권세를 믿고（虎の威を借りて）

「99個の知恵」趙ソンギ編、センガクハヌンベクソン、1993

１－１　３．文学とコミュニケーション　補充・深化　全文（P108～P111）

登場人物　楚の宣王、江乙、虎、きつね、ウサギ、熊

あらすじ

中国の楚という国に昭奚恤という宰相がいた。昭奚恤は北方の国々からたいへん恐れられていた。宣王はその理由を臣下に聞いたところ、江乙という臣下は虎の威を借りて威張るきつねの話をする。北方の国々が恐れなくてはならないのは、昭宰相ではなく昭宰相の後ろにいる宣王であるといって、宣王に取り入ろうとした。

江乙がいった話は、虎の餌になる寸前のきつねが、知恵をしぼり、自分は神様が指名した動物の頭だと言った。するとウサギと熊が逃げたので、虎はきつねが動物の頭と思いこみ、謝ってその場を去った、という話をふまえている。中国の寓話からの教材化である。

・この話の内容を理解しよう。この話から「狐仮虎威」という故事成語ができた。どんな場合にこの言葉を使うか。身の回りの出来事から例を探してみよう。

・作品の寓意を読みとり、身の回りの出来事から例をみつけて発表する、という学習である。

８．삼국지（三国志）

「三国志」羅貫中、李文悦評訳、ミンウン、1996

１－１　４．メモしながら読む　補充・深化　一部（P139～P140）

登場人物　劉備、老人

あらすじ

劉備が川を渡ろうとするが船がなかった。しかたなく歩いて渡っていると、岸にいた老人が自分も渡らせてほしいというので、再びもどっておぶって渡った。すると老人は忘れ物をしたというので、また引き返して忘れ物を取って帰った。ようやく川を渡った時、老人が自分に親切にしてくれた理由を聞くと、劉備は二回の苦労は二倍の功徳になると答えた、という話である。「三国志」の劉備の逸話からの教材化である。

・この物語を読んで、感じたこと、劉備に言いたいことを書いてみよう。書いた文章を友だちの感想とくらべてみよう。感想が違うなら、その理由は何だろう。

・登場人物の言動に対して、生徒どうしの見方・考え方を出し合う、という学習である。

９．소설 동의보감（小説東医寶鑑）

李恩成（イ・ウンソン）「小説東医寶鑑」創造と批評社、1990

（朝鮮時代の名医であった許浚の一代記を素材にした「小説東医寶鑑」の一部）

１－１　５．生と葛藤　　小単元（１）　一部（P151～P162）

登場人物　許浚（フォ・ジュン）、鄭サング、宇ゴンボ、農夫、村の病人たち

あらすじ

許俊が宮廷医の科挙を受けに行く途中のことである。泊っていた旅館に、緊急の病人があると農夫が尋ねてきたので診に行った。許俊の医術は有名なので、同じく宮廷医の科挙を受けるために泊まっていた鄭サングと宇ゴンボも見に行く。あくる日の朝、彼らは出発しようとするが、許俊の医術の噂を聞いた村の病人が集まってきた。鄭サングは科挙のために出発し、許浚と宇ゴンボは断れず半日診ることにした。半日が経つと隣の村からも病人が来て診きれない。宇ゴンボは、これ以上延ばすと科挙に間に合わないと判断して、許俊に一緒に行くことを勧めるが、許俊は月が昇るまで診るといって一人で残った。許浚は科挙に間に合わないかも知れない状況なのに、貧乏で気の毒な病人たちを一人で一生懸命診ていた。朝鮮時代の名医・許俊の逸話である。

・一番感動的なところはどこか。許俊の判断についてどう思うか。この作品にあらわれた葛藤について考えてみよう。主人公の許俊に手紙を書いてみよう。

・多彩な学習内容の手引きである。手引きでは補足として、許俊の判断について、義のある人と評価する意見と、大事な科挙をおろそかにするのは良くないという対立した意見の例が出されていて、生徒たちが判断しやすいように工夫されている。

10．바람을 파는 소년（風を売る少年）

李俊淵（イ・ジュンヨン）「特殊学校中学部国語２」教育部、1994

「国語１－１」　５．生と葛藤　補充・深化　全文（P193～P196）

登場人物　ナンス、おじいさん、うちわ売り、おじいさんのお客さんたち

あらすじ

ナンスの家は竹で扇子（プチェ）を作って市場で売っていた。ある夏の日、扇子を売りに出かけるおじいさんについていった。曾おじいさんから継がれてきた扇子が有名なことはよく聞いていたので、売れ行きを楽しみにしていた。

市場には他の３ヶ所でうちわを売っていた。中でもメガホンを使って客寄せをしている店の色とりどりのナイロンのうちわはどんどん売られていく。しかし、おじいさんの作った粗末な竹の扇子は昼になっても売れなかった。おじいさんがいない間、ナンスは勇気を出して宣伝してみるが、ほんの小さい声である。

ちょうど通りかかったおじいさんのお客さんたちに、「竹村の扇子は以前と今と全然変わらないですね。風も形もいいし、有名な扇子ではありませんか」と誉められたので、おじいさんの扇子に自信をもった。そしてナンスは、ナイロンを売っている人と競争でもしているかのように、声を高くして宣伝するようになった。

・小説の展開に沿って、主人公ナンスの心の状態がどのように変わっていくか、読みとってみよう。

・登場人物の心理変化を追求する学習である。日本の学習の手引きに多い内容であるが、韓国の教科書では、このタイプの手引きはそれほど多くはない。

11. 벙어리 삼룡이（サムヨンイ）

羅稲香（ナ・ドヒャン）「正統韓国短編99編」タイム企画、1994

１－１　５．生と葛藤　補充・深化　全文（P198～P209）

登場人物　サムヨンイ、主人、主人の息子、若奥さま

あらすじ

あるヤンパンの家に、サムヨンイという口はきけないがよく働く使用人がいた。主人はかわいがってくれたが、主人の息子にはいつもいじめられた。親の言うことを聞かない乱暴で甘えん坊のその息子にお嫁さんが来た。きれいでやさしいと評判の若奥さまであったが、息子はその奥さまに暴力をふるうようになった。息子の暴力を見ていられなくなったサムヨンイは、若奥さまを助けようとして、追い出されてしまう。やむをえずサムヨンイは家を放火し、主人と若奥さまを助け出すが、自分は大やけどをして死んでしまう。

・話の展開によって主人公サムヨンイの心の状態はどう変っていくか。主人公の葛藤の解決方法についてどう思うか。

・登場人物の心理変化と、心の葛藤と、登場人物の行動をどう考えるか、という学習である。

12. 홍길동전（洪吉童伝）

許均（フォ・ギュン）朝鮮時代の文人

「洪吉童伝、田禹治伝、徐花潭伝」金イルヨル訳注、高麗大学校民族文化研究所、1996

１－１　７．文学と社会　小単元（１）　一部（P241～P244）

登場人物　洪吉童、両親

あらすじ

ヤンバンの庶子として生まれた身の上の吉童は、男として出世できないどころか、父を父と呼べない、兄を兄と呼べない境遇にあった。使用人からも蔑視をうける身の上を嘆いていた。ある日、そのことを父親に話したら、世の中にはお前のような身の上は一人ではない、と叱られる。何日間か悩んで母親に自分の心情を打ち明けて、家を出ることを告げた。（原作ではこの後、洪吉童は、全国に影響を与える義賊になって、官吏の不正の財物を奪取し、貧しい百姓に配る。その後国を離れ、理想的な国を建設する。本文は家を出る前の冒頭部分にあたる。）

・物語を要約してみよう。洪吉童の悩みについて考えてみよう。この作品に現れた社会の特徴について書いてみよう。洪吉童に慰めと激励の手紙を書いてみよう。

・物語のあらすじを要約し、主人公の葛藤に共感し、封建時代の問題点を解明する、という学習である。韓国の教科書では、社会史的な問題を扱った作品の場合、社会背景を考えさせる手引きが付いている。小説教材の一つの役割と考えられているようである。

13. 옥상의 민들레꽃（屋上のタンポポ）

朴婉緒（パク・ワンソ）「ささやき」セムト社、1997

１－１　７．文学と社会　　小単元（３）　全文（P254～P269）

登場人物　ぼく、家族（両親、兄、姉）、マンションの人たち（会長、おばさん、若いおじさん、老教授）

あらすじ

あるマンションにおばあさんの飛び降り自殺がつづいた。マンションでは緊急会議が開かれた。大人たちは自殺の理由についていろいろと詮索する。嫁と娘は大事にしてあげてきたのに、こんな結果になって納得できない。大人たちは勝手な理屈を言い合っていたが、ぼくはおばあさんたちがなぜ自殺したか、どうしたら自殺を防ぐことができるのかを知っていた。ぼくが知っている理由は自分が経験したからである。

それは、学校に入る前の親の日のこと、兄さんはお母さんにカーネーションとブローチを、姉さんはお父さんにカーネーションとネクタイピンをプレゼントする。ぼくが前日折り紙で作ったカーネーションを渡そうとする時、兄さんと姉さんは親への感謝の歌を歌いはじめる。ぼくの知らない歌なので黙ってそっとテーブルの上にカーネーションを置いておいた。昼、遊びつかれて帰ってきてみたら、ぼくの作ったカーネーションはごみ箱の中に捨てられていた。お母さんは友だちと電話していて、三人も子どもを産んで恥ずかしい、産まなければよかった、と話している。ぼくは愛されていないと思って屋上に上り、夜を待っていた。

夜になってきれいな月の光の下でタンポポをみつけた。よくみたらタンポポはほこりの塊のようなところに咲いている。風に吹かれて飛んでいたタンポポの種の中でたった一つが、幸いにも根をおろすことができたのだと思い、タンポポに生命の強さを教えてもらった。しかし、ベランダにタンポポを植えることで自殺を防ぐことができることを、みんなにいう機会は与えてもらえなかった。韓国の現代社会における老人問題を描いたシリアスな小説である。

・会議の場面を思い浮かべて、人物の性格について言ってみよう。この作品に現れた現代社会の姿について考えてみよう。この作品のタンポポのように、苦しいときに勇気と希望を与えてくれる存在があれば、友だちに紹介してみよう。新聞や雑誌、または身の回りから、あたたかい話を調べて発表してみよう。
・この作品は、韓国の現代社会の老人問題をシリアスにとりあげた作品であり、祖母、母、ぼくの三世代の価値観の違いがくっきりと描かれている。学習の手引きでは、屋上のタンポポに比喩されている意味について、自分の問題として、じっくりと考えさせている。

14. 키다리 아저씨（足長おじさん）

ジン・ウェブスター 「足長おじさん」金イルウァン訳、キダリ出版社、1987

１－２　１．能動的に読む　補充・深化　一部（P34）

登場人物　ジュディ　足長おじさん

あらすじ

足長おじさんの物語の一部で、ジュディが足長おじさんに書いた手紙の一節。ジュディは学校の寮に住むようになって友だちから新しく名づけられた。ジュディは養女なので、自分の名字を電話帳の一番最初から取り、名前はお墓の碑石から取ったと聞かされた。家族から愛されているような気がするジュディというあだ名が気に入ったので、これからはジュディと呼んでほしいという内容の手紙である。

・本文を読む前に、ジュディがどんな立場にあるか、「ジュディは、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿」というように、推測して書いてみよう。
・「読む前に」という手引きは、韓国の教科書の特徴の一つである。作品を読む前に生徒に読みの構えを作っておくための手引きである。小説の世界への導入の工夫といえる。

15. 소나기（にわか雨）

黄順元（ファン・スンウォン）「にわか雨」ヤンウ堂、1986

１－２　２．文学の美しさ　小単元（２）　全文（P49～P62）

登場人物　少年、少女、少年の両親

あらすじ

ひと時のにわか雨のように短く終わってしまった、少年と少女の純粋な恋を描いた小説である。ある日、都会から転校してしてきた少女は、学校の帰りに川の飛び石の真中にすわっていた。次の日、少女はまた飛び石の真中にすわっていた。少女は立ち上がり、飛び石を渡ってから、急に振り向いて少年のほうへ小さな石を投げた。少年は細石を拾ってポケットに入れた。次の日には少女はいなかった。

土曜日のこと、何日も姿がみえなかった少女が向こう岸で水遊びをしていた。少女が山へ行ってみようと誘うので山に行った。花を摘んだり、子牛に乗ってみたりして楽しい時間をすごす。急ににわか雨が降り出したので、番小屋で雨宿りしたが、天井から雨が漏るので、キビの畑の中で雨宿りをする。雨が止んだ後、帰り道に小川が氾濫していたので、少女をおんぶして渡った。

ある日、少女は川辺にきて、法事の後に引っ越すことを告げた。少年は、少女からなつめをもらったので、そのお返しとして夜ひそかにくるみをとっておいて、翌日渡そうと思っていた。次の日の夜、少女の家の法事に行って来たお父さんは、少女の死を告げる。少年と少女のはかなく淡い恋物語である。

・この小説の主な事件を調べてみて、事件によって人物の感情がどのように変化しているか、書いてみよう。この作品の文学的美しさと価値は何か、考えてみよう。少女の立場になって、少年に手紙を書いてみよう。
・「文学の美しさ」という単元にふさわしい作品である。この作品は中学生の年代の美しい恋物語であり、その美しい恋物語をじゅうぶん鑑賞できるような手引きである。

16. 동명왕 신화（東明王神話）

李マンキ編　「韓国の代表説話」ビンネム出版社、1997

１－２　２．文学の美しさ　小単元（４）　全文（P73～P74）

登場人物　高朱蒙（高句麗の始祖）、柳花（朱蒙の母親）、金蛙王（夫餘の王）

あらすじ

高句麗の始祖である高朱蒙は、神様の息子と柳花の間に卵から生まれた。夫餘の金蛙王のところで育った朱蒙は、弓に優れた能力を持った非凡な子どもだったので、金蛙王の息子たちから命の危険を感じて逃げることにした。兵士たちに追われて逃げる時、亀と魚が作った橋に助けられた。その後、南の方で高句麗という国を作った。高句麗の建国神話である。

・「文学の美しさ」の小単元は、三編の昔話（神話・口承文芸）で構成されている。学習の手引きは教材ごとではなく、三作品の後にまとめて出てくる。日本の教科書でいう読書教材のような性格であるが、神話や昔話は日本の中学校国語教科書には出てこない。

17. 지네장터（ムカデ市場）

徐テソク編　「口碑文学」ヘネム出版社、1997

１－２　２．文学の美しさ　小単元（４）　全文（P75～77）

登場人物　スンイ、ヒキガエル、ムカデ、村人

あらすじ

スンイは目の不自由なお父さんと二人で暮らしていた。ごはんの支度をしていた時、ヒキガエルが来たので、ごはんを恵んでやった。すると、毎日ヒキガエルがくるようになった。隣の村にムカデが人を害するので、その対策としていけにえを供えるという話になった。貧しい暮らしをしていたスンイは、お父さんのために、いけにえにいった。その晩、ムカデが出てきた時、いつの間にかヒキガエルがきてムカデと戦い、恩返しをしたという伝説である。

・小単元なので個別の学習の手引きは付いていない。

18. 우정의 길（友情の道）

編集部　「韓国人の民話」ベストブック、1999

１－２　２．文学の美しさ　小単元（４）　全文（P77～P81）

登場人物　金、朴、朴の家族

あらすじ

幼な友達の金と朴の友情の物語である。金は科挙に合格して高い地位についたが、朴は友だちを当てにして暮らしていた。朴は長い旅をして金を訪ねたが、金から冷たくされる。家に帰ってみると家には誰もいない。みんな、とうとう乞食になったかと思った朴は、ある日、葬式をしている大きな家に着いて中をみると、自分の家族ではないか。朴の家族も、死んだと思っていた父親が生きているのをみてびっくりする。金からお父さんは死んだと告げられていたのだった。友だちの金からの桶をあけてみると、そこにはお金がぎっしりあった。冷たくしたことや、葬式のことなど、自分のためにしたことだと悟った朴は、科挙に専念して合格したという。科挙にまつわる友情の物語である。

・ここで、「東明王神話」「ムカデ広場」「友情の道」の三作品について、共通の学習の手引きが出てくる。それぞれの昔話が言おうとしていることは何か、書いてみよう。三編の昔話の特徴を考えてみよう。三編の昔話の教訓を書いてみよう。神話・伝説・民話の中で一つの形式を選び、おもしろい話を調べて、次のようにまとめてみよう（物語の形式・題目・登場人物・主要な事件・結末）。

・韓国の教科書では昔話の定義は広く、神話・伝説・民話を含んでいる。学習の手引きの内容は、昔話（神話・伝説・民話）の特徴、教訓をとらえ、発展として自分で調べてみる、という内容であり、このジャンルの特徴をよくとらえている。

19．요람기（揺籃期）

呉ヨンス　「伝統韓国文学大系」語文閣、1986

１－２　２．文学の美しさ　補充・深化　一部（P88～P89）

登場人物　ぼく、姉、姉の友だち

あらすじ

大人になったぼくは、子どものころの何でもない会話や情景がなつかしくてならない。真夏の昼、縁側で姉に、夕顔はなぜ夜に咲くのか、流れ星はおいしいのかと、たわいのないことをよく聞いた。夜には姉の友だちが集まってきぬた打ちをしたり、とうもろこしやジャガイモを食べながらおしゃべりをするのをそばで聞いていた。姉のそばで流れ星を数えながら大人になったら流れ星を拾いに行こうと思いながら眠った。子どもの頃の思い出を回想した小説である。

・この小説を読んで感じたことを話してみよう。姉は夕顔は夜にだけ咲くという。もし自分が聞いたらどう答えるだろう。作中の人物の立場になって考える、という手引きである。

・この作品は、タイトルにあるように幼い頃の思い出を回想した作品であり、日本の教科書では随想・エッセーのジャンルに入る。姉と弟の心の交流を読みとろうとする学習である。この作品は「補充・深化」の教材である。「補充・深化」の単元は、生徒の関心によって適切な作品を選択し学習する活動であり、日本の教科書にはみられない選択型の学習方法である。

20．흰 종이수염（白い紙ひげ）

河瑾燦（ハ・クンチャン）「正統韓国文学大系13」語文閣、1986

１－２　６．文学と読者　小単元（１）　一部（P193～P212）

登場人物　トンギリ、両親、チャンシギ、ヨンドリ

あらすじ

韓国戦争直後、少年のトンギリと徴兵に行って片手をなくした父親、その家族と周りの貧しくて辛かった当時の生活を描いた小説である。

トンギリは、学校に行かないヨンドリと一緒になって川で泳いでいると、軍人を乗せた汽車が通り過ぎた。昼、家に帰ってみると、なんとお父さんが徴兵から２年ぶりに帰ってきていた。よくみたら片手がなかった。翌日、トンギリは学校に行かず川で泳いでいたら、学校帰りの友達から片手のないお父さんのことをからかわれた。夜、酔っ払って帰ってきたお父さんは白い紙をもっていた。お父さんは、映画館に就職したといい、しばらくしてなぜか泣いていた。

翌朝、トンギリは白い紙でひげを作るお父さんを手伝う。学校の帰りにチンドン屋が向こうから歩いてくるので走っていってみたら、チンドン屋は頭に三角帽子をかぶって顔には白いものを塗っている。あごにはひげがはためいていて、メガホンで映画を宣伝していた。子どもたちが大勢後ろをついてきて真似をしている。一瞬その人と目があった。なんとお父さんではないか。急に目の前がかすんでみえた。しばらくしてみると、チャンシギが紙のひげを触りながら笑っているので、チャンシギを殴り倒した。それをみたお父さんは途方にくれて喧嘩を止めさせようとする。韓国戦争の悲劇を今に伝えようとする小説である。

・この作品の登場人物が葛藤する理由は何か。トンギリの感情状態をグラフで書いてみよう。作家がこの作品で伝えようとしたことは何か。結末をふまえて、トンギリの立場で日記を書いてみよう。「受難時代」（同じ作者の作品）を読んで、「白い紙ひげ」とくらべてみよう。

・韓国戦争の戦後の家族を描いた作品であり、学習の手引きは、人物の葛藤、作品の主題など小説としての基本的な学習と、韓国戦争の社会史的な学習を合わせもった手引きになっている。同じ作者の作品との「くらべよみ」も指示されている。

21．숨쉬는 영정（呼吸する遺影）

丘仁煥（ク・インファン）「正統韓国文学大系49」語文閣、1986

１－２　６．文学と読者　小単元（２）　一部（P218～P230）

登場人物　テギュ、ゼギュ、母親、キヒョン、妻

あらすじ

韓国戦争で離れ離れになった兄が弟を探す話。兄のテギュは戦争中に別れた弟を探すために放送局に放送を頼んだ。弟を探す放送が流れた４日後に赤十字から弟が見つかったという連絡があった。その時、兄テギュは病気で倒れた。弟ゼギュは、二十数年ぶりに会う兄テギュの姿を想像しながら避難時のことを回想する。戦争の避難をする時、母親は無理やり二人の兄弟を南のほうに避難させて、自分は故郷に残ることを固く言う。兄弟はいやいやながら母親のもとを離れた。避難の途中、飛行機の爆撃に追われてテギュとゼギュは離ればなれになってしまったのだった。

弟ゼギュは急いでソウルの赤十字に着いた。ゼギュは何時間も兄を待ったが現れないので不安に思っていた。ようやく着いたと告げられて、みると息子キヒョンが兄の遺影をもって現れた。そして、昼頃に亡くなったことを伝えた。弟ゼギュはいつまでも遺影に取りついて泣いている。兄弟を引き裂いた韓国戦争の悲劇を伝える小説である。

・題名を「呼吸する遺影」と名づけた理由は何か。この作家が小説をとおして伝えようとすることは何か、時代的状況と関連づけて話してみよう。

・この作品も韓国戦争から取材している。現在のソウルで弟を捜す兄の話に、戦争時の避難の時の母、兄弟の別離の回想を折り込み、韓国戦争と家族の関係を描いた作品である。学習の手引きも、小説教材としての鑑賞と、戦争による別離という時代状況との関連を考えさせようとしている。

22. 우산 장수 할아버지（傘売りのおじいさん）

金チョルス　http : //pbooks.zzagn.net/home.html

１－２　６．文学と読者　補充・深化　一部（P236～P238）

登場人物　傘売りのおじいさん、ヨンシニ、ミンヨンイ

あらすじ

ヨンシニは雨の日、かさを持ってきてなかったので、学校の帰りにかさ売りおじいさんにかさを貸してもらうことにした。ミンヨンイと一緒に行く途中、壊れたかさが捨てられているのをみつけた。それはかさ売りおじいさんのかさであった。おじいさんは10年間も雨の日にかさを貸してあげるボランティアをやっていた。壊れたかさをみると、貸してもらった人がかさを捨てたことに腹が立った。それで、おじいさんにどうしてかさを貸してあげているのか、聞いてみた。

・次の物語を読んで、後に続く物語を想像して書いてみよう。

・「文学と読者」という単元の「補充・深化」の教材であり、物語の一部（この場合、発端）を教材として、続きの話を創作する、という学習である。ちなみに、教師用指導書によると、原作のこの後のストーリーは以下のとおりである。貧しい子どもの頃、おじいさんの妹は雨の日、傘もささずに雨にぬれて帰る途中、かわいい傘をさして自慢するクラスの友だちに会った。その晩、ひどく病んだ妹はあの世の人になった。それがきっかけで傘も持たないで通る人のためにこの仕事をやっている、という話である。

23. 나비（ちょうちょ、日本の題名は「少年の日の思い出」）

ヘルマン・ヘッセ　「正統韓国文学大系13」語文閣、1986

１－２　６．文学と読者　補充・深化　一部（P238～P242）

登場人物　ぼく、エーミール

あらすじ

ぼくとエーミールは仲のいい幼な友達であった。子どもの頃、蝶を収集することに、学校もごはんの時間も忘れるほど夢中になっていた。隣の家のエーミールが不思議な蝶を持っていると聞いたので、そっとエーミールの部屋に行って蝶を取り出した。帰る途中にお手伝いさんに

会い、自分の取った行動に気づいた。後、返しに行ったが、ポケットの中に入れたので蝶はつぶれていた。

・この小説の中で、ぼくは何のために葛藤しているか、その理由を書いてみよう。私がもしこの小説の主人公なら、どうするか、書いてみよう。
・日本の中学校「国語」教科書にも載っている作品であるが、ここでは一部だけの掲載である。学習の手引きは、一部だけの掲載のメリットを生かして、主人公の葛藤を読みとった後、生徒たちに自分ならどうするか、という問題を考えさせている。

第２章　韓国中学校小説教材の特徴

本章では、第一章でみてきた韓国中学校「国語」教科書の小説教材について、その特徴について考察する。考察の視点は単元構成、教材数、主題、掲載方法、翻訳作品などである。（単元名、単元構成、教材名、著者、掲載量については、巻末の「資料編」を参照。）

１．韓国の小説教材の特徴

「国語１－１」「国語１－２」（2001度版）の小説教材をみると、以下のような特徴を見出すことができる。

まず、単元名をみると、文学教材がかなり重視されていることがわかる。「国語１－１」:「文学の楽しさ」「文学とコミュニケーション」「文学と社会」、「国語１－２」：「文学の美しさ」「文学と読者」のように、「文学・・・」を単元名に明記して、文学の単元であることが強調されている。

次に、単元構成の面でみると、多くの単元において、一つの大単元の中に小説教材が二つ以上採用されている。「文学の楽しさ」（お父さんの形見、理解のプレゼント、こいぬのうんち）「文学とコミュニケーション」（きつねとへび、星の王子さま、タルムード、虎の威を借りて）「生と葛藤」（小説東医宝鑑、風を売る少年、サムヨンイ）「文学の美しさ」（にわか雨、東明王神話、ムカデ市場、友情の道、揺籃期）「文学と読者」（白い紙ひげ、呼吸する遺影、傘売りのおじいさん、ちょうちょ）のように、多くの単元で２編～５編の複数の小説が採用されている。日本の教科書とくらべて、教材数の多い理由の一つである。

そして、大単元の複数の文学教材は、単元構成において、それぞれの小説教材としての役割をもっている。この点は、日本の教科書にはみられない特徴である。「小単元１～４」「補充・深化」「読む前に」「考えをひろげ」として位置づけられていて、大単元を構成する複数の小説教材は、それぞれの役割を分担するように配置されている。日本の国語教科書では、大きな話題単元の中で小説教材は独立していて、同じ比重の教材として位置づけられている。

また、単元内の各小説教材は、単元構成の位置づけにしたがって、その位置づけに適応した「学習の手引き」が付けられている。単元内での小説教材の位置づけによって、読む前に、内容学習、目標学習、発展学習、考えをひろげ、補充・深化、自己点検、などの多様な手引きが付けられている。（学習の手引きについての考察は、前稿を参照）。

また、後でくわしく考察するが、日本の国語教科書では、小学校・中学校・高校とも全文掲

載が原則であるが、韓国の小説教材はそうではない。巻末の資料編で明らかなように、「１－１」「１－２」の23編のうち、全文掲載は13編、部分掲載は10編である。教材化の意図、教材としての位置づけによって、全文か部分かの選択がなされているようである。日本の教科書にくらべて教材数が多い理由でもあるが、この方法によって、小説教材の教材発掘や教材化の方法において、多様な、そして多彩な開発が可能になったと思われる。韓国の教科書では、現代小説、近代小説、随想的作品、伝記、神話・昔話、外国の翻訳作品と教材ジャンルが広い。豊富な教材数によって可能になったことである。

２．小説教材の主題

韓国の教科書の小説教材は数が多いだけにその主題は多様である。主なものとしては教訓、愛、身分、葛藤、戦争などがあるが、とくに教訓や愛、葛藤を主題にした作品が多い。その中でも韓国戦争（日本では朝鮮戦争）を背景にした「白い紙ひげ」「呼吸する遺影」や、韓国の神話「東明王神話」は韓国独特の教材と思われる。

主題別に教材内容やその特色をみると、以下のようである。

①教訓

教訓を主題とする教材とは、たとえば「お父さんの形見」「理解のプレゼント」「こいぬのうんち」「きつねとへび」「星の王子さま」「タルムード」「三国志」「友情の道」などである。その具体的な教訓をみると、「お父さんの形見」と「こいぬのうんち」「きつねとへび」では、一見何の役にも立たないように見えても、その役割と価値は必ずある。自分自身を見つめ直そうという主題である。「星の王子さま」では、数字だけにこだわる大人の価値観が批判されている。「タルムード」では、何にであれ偏ることは望ましくなく、目標を忘れずにバランスのとれた生活の重要さを伝えている。「三国志」では、一度始めたことは最後まで成し遂げてこそ価値があること。「友情の道」では、友のためになるのなら非難されるとしても強い姿勢が必要であるというメッセージを伝えている。

②愛

愛を主題とする作品も少なくない。「理解のプレゼント」「こいぬのうんち」「屋上のタンポポ」「にわか雨」「ムカデ市場」「傘売りのおじいさん」「揺籃期」「呼吸する遺影」などである。

くわしくみると、「理解のプレゼント」と「傘売りのおじいさん」「揺籃期」は、人の心を素直に受け止めて守ろうとするような愛であり、「理解のプレゼント」では子供の心を受け止める愛、「傘売りのおじいさん」では雨の日に傘を持ってないで通りを行く人のために、「揺籃期」では幼いころの子供の想像世界を見守ろうとする姉のやさしい愛がそれである。そして「こいぬのうんち」では自分のすべてを受け入れてくれる美しいタンポポの愛、「にわか雨」では少年と少女の短くて淡い恋、「ムカデ市場」では目の不自由な父親のためにいけにえになる娘の親への思い、「呼吸する遺影」では戦争で離れ離れになった兄弟のお互いへの思いなどが描かれている。このように人間の愛にはさまざまな姿のあることを、小説を通して伝えようとしている。

③封建制度

封建的な身分制度を主題とする作品としては、「サムヨンイ」「洪吉童伝」があげられる。「サムヨンイ」では身分制度のある封建社会でヤンパンの家で働いている主人公「サムヨンイ」は、主人の息子からいじめや侮辱をうけ、ただ耐えることしか覚えていない。「洪吉童伝」では庶子として生まれた「洪吉童」は父をお父さんと呼べない辛さから身分のない自由な社会を求めていく。小説教材を通して封建制度の矛盾を理解する、というねらいがあるものと思われる。

④葛藤

葛藤を主題とする作品としては、「サムヨンイ」「小説東医宝鑑」「風を売る少年」「洪吉童伝」「白い紙ひげ」「ちょうちょ（少年の日の思い出）」などがある。「サムヨンイ」ではひどい目にあうばかりでいじめられても仕えるべき主人の息子と、主人の息子から暴力を受ける若奥さまとの間で、どちらを大事にすべきか、葛藤する。「小説東医宝鑑」では何年も準備してきた試験を受けに行くか、試験に間に合わないかもしれない状況で目の前にある病人たちを診るか、葛藤する。「風を売る少年」では売れ行きを期待していたおじいさんの扇子が全然売れないことで落ち込んでいたが、お客さんからおじいさんの扇子が誉められて自信を取り戻す。「洪吉童伝」では庶子として生きていくか、庶子としての自分を捨てて自由に生きるか、葛藤する。「白い紙ひげ」では戦争で片手をなくした父をみて戸惑い葛藤する。「ちょうちょ（少年の日の思い出）」では蝶がほしいという欲望から盗みをおかした後、自分のしたことに気づいて葛藤する。葛藤は小説教材の重要な要素であるが、韓国の小説教材ではとくに重視されていて、学習の手引きも葛藤に着目した手引きが多い。

⑤戦争と人間

戦争と人間という主題は、「白い紙ひげ」と「呼吸する遺影」などで取り上げられている。「白い紙ひげ」は韓国戦争直後、少年のトンギリと徴兵に行って片手をなくした父親、その家族と周りの貧しくて辛かった生活を描いた小説である。「呼吸する遺影」は韓国戦争中、離れ離れになった兄弟が数十年後のこと、再会を目前にして兄が死んでしまう。兄の遺影と再会するという作品である。韓国戦争の直後の話と現代の話とで、戦争と人間というテーマを二つの側面からとらえようとしている。小説教材の全体的な構想からのバランスのよい教材化といえる。

⑥祖先の思想

神話・伝説・民話の教材化は、韓国の教科書の大きな特徴の一つである。「東明王神話」は三国時代の一つの国である高句麗の建国神話である。始祖である高朱蒙の優れた能力と動物から命を助けられて、後に国を作るという神話である。韓国の建国神話は小学校の教科書にも掲載されている。日本の国語教科書には、小学校、中学校とも神話の教材は全くみられない。また、「ムカデ市場」は説話・伝説としての教材化、「友情の道」は民話としての教材化である。祖先から引き継いできた民族の思想を伝える神話・伝説・民話などが、小説のジャンルとして明確に位置づけられていることがわかる。

３．掲載の方法

小説教材の掲載方法にも特徴がみられる。全文掲載と部分掲載の二つの形態がある。「１－１」「１－２」でみると、全文掲載13編、部分掲載10編の割合である。

全文掲載の作品は次のようである。「お父さんの形見」「理解のプレゼント」「こいぬのうん

ち」「きつねとへび」「タルムード」「虎の威を借りて」「風を売る少年」「サムヨンイ」「屋上のタンポポ」「にわか雨」「東明王神話」「ムカデ市場」「友情の道」の13編である。全文掲載の中でも「屋上のタンポポ」（16頁）、「にわか雨」（14頁）などの長編もあれば、「傘売りのおじいさん」（２頁）、「きつねとへび」（１頁）のような短編もある。

部分掲載の作品は次のようである。「星の王子さま」「三国志」「小説東医宝鑑」「洪吉童伝」「足長おじさん」「揺籃期」「白い紙ひげ」「呼吸する遺影」「傘売りのおじいさん」「ちょうちょ（少年の日の思い出）」の10編である。全文掲載と同様に部分掲載でも、「白い紙ひげ」（20頁）、「呼吸する遺影」（13頁）のような長編から、「洪吉童伝」（４頁）、「三国志」（２頁）、「星の王子さま」（１頁）のような短編まである。部分掲載といっても分量は必ずしも短くはない。あくまで教材化のねらいによって掲載量は決められていくものと思われる。

どうして全文と部分の掲載になっているか、その理由としては次のように考えられる。

一つには、単元構成の位置づけである。一つの大単元の構成をみると、二つ以上の〔小単元〕〔読む前に〕〔考えをひろげ〕〔補充・深化〕になっている。つまり、その小説教材が単元の中でどこに構成されるかによって、その比重と役割が違ってくるのである。たとえば、小単元に構成されている「お父さんの形見」「理解のプレゼント」「にわか雨」「東明王神話」「ムカデ市場」「友情の道」といった教材は全文掲載されている。しかし、すべての小単元に全文が掲載されているわけではない。小単元に部分が掲載されている教材としては、「小説東医宝鑑」「白い紙ひげ」「呼吸する遺影」である。大単元は小単元を中心としているので、小単元の教材は全文・部分を問わず、ほとんど長い作品である。

二つには、長い作品は小単元のほか、〔補充・深化〕の「こいぬのうんち」（９頁）でもみられるが、その以外の教材「ちょうちょ（少年の日の思い出）」（４頁）、「虎の威を借りて」（１頁）はほとんど短い作品である。〔補充・深化〕〔読む前に〕の教材は、１～４頁の分量で、部分掲載の形式をとっていることが多い。

以上のことから、全文か部分かは、掲載量に関係なく、単元の中での役割と位置づけによるものと考えられる。部分掲載だからといってその比重が決して軽いわけではない。

４．外国の翻訳教材

小説教材23編という数多い教材の中で、外国の翻訳小説は８編である。その国をみると、アメリカ、フランス、ドイツ、ギリシア、ユダヤ、中国といった多様な国の作品である。アメリカでは「理解のプレゼント」「足長おじさん」、フランスでは「星の王子さま」、ドイツでは「ちょうちょ（少年の日の思い出）」、ギリシアでは「きつねとへび」、ユダヤでは「タルムード」、中国では「虎の威を借りて」「三国志」である。多様な国からの採用となっている。

また、翻訳作品としては、生徒たちに親しみのあるものが多く採用されている。子どものころから親しく読まれてきた身近な作品として、「足長おじさん」「星の王子さま」、イソップ寓話をはじめ、知恵の宝庫「タルムード」、故事成語「虎の威を借りて」、中国の長編小説「三国志」がそれである。その中の「理解のプレゼント」は1989年から現在まで中学校国語教科書に掲載されており、長く愛されてきた作品である。しかし、日本の作品は入ってない。この事情は日本の中学国語教科書でも同じであり、外国の翻訳教材といえば、いまだにヨーロッパ中心

でアジアの文学からの教材化は遅れている。とくに日韓の中学校国語教科書において、日本文学・韓国文学の相互の教材化は、これからの大きな研究課題であると、私たちは考えている。

以上、韓国中学校「国語」教科書の小説教材について考察してきた。韓国の国語教科書の基礎的研究の報告であるが、日本の教科書研究に活用していただければ幸いである。

【資料編】　中学校「国語」（教育人的資源部、2001）

年	単　元　名	単元構成	教　材　名	著　者	掲載量（頁）
1－1	1．文学の楽しさ	小単元（２）	お父さんの形見		●（６）
		小単元（４）	理解のプレゼント	ビラード	●（６）
		補充・深化	こいぬのうんち	権正生	●（９）
	3．文学とコミュニケーション	読む前に	きつねとへび	イソップ	●（１）
		考えをひろげ	星の王子さま	サンテグジュペリ	★（１）
		補充・深化	タルムード	マビン・トケイア	●（１）
		補充・深化	虎の威を借りて		●（３）
	4．メモしながら読む	補充・深化	三国志	羅貫中	★（２）
	5．生と葛藤	小単元（１）	小説東医宝鑑	李恩成	★(12)
		補充・深化	風を売る少年	李俊淵	●（４）
		補充・深化	サムヨンイ	羅稻香	●(12)
	7．文学と社会	小単元（１）	洪吉童伝	許均	★（４）
		小単元（２）	屋上のタンポポ	朴婉緒	●(16)
1－2	1．能動的に読む	補充・深化	足長おじさん	ジン・ウェブスター	★（１）
	2．文学の美しさ	小単元（２）	にわか雨	黄順元	●(14)
		小単元（４）	東明王神話	李マンキ編	●（２）
		小単元（４）	ムカデ市場	徐テソク編	●（３）
		小単元（４）	友情の道		●（５）
		補充・深化	揺籃期	呉ヨンス	★（２）
	6．文学と読者	小単元（１）	白い紙ひげ	河瑾燦	★(20)
		小単元（２）	呼吸する遺影	丘仁煥	★(13)
		補充・深化	傘売りのおじいさん	金チョルス	★（２）
		補充・深化	ちょうちょ（少年の日の思い出）	ヘルマン・ヘッセ	★（４）

＊掲載方法で全文は●、部分は★、を表示